小児の肺炎球菌感染症の予防接種について

令和6年10月から、20価ワクチン（プレベナー20）が定期接種化されます。

令和6年10月から20価ワクチンが定期接種化されることに伴い、13価ワクチン（プレベナー13）が使用できなくなり、15価ワクチン（バクニュバンス）と20価ワクチンの2種類になりました。13価ワクチンで接種を開始した場合は、原則、20価ワクチンに切り替えて接種となります。15価ワクチンで接種した場合は、原則、引き続き15価ワクチンの接種となります。

※予診票のワクチンの種類には、20価の記載がないので、**20価を接種する時は、予診票の枠外余白に「プレベナー20価」と記載してください。**

肺炎球菌による感染症について

肺炎球菌は、細菌による子どもの感染症の二大原因のひとつです。この菌は子どもの多くが鼻の奥に保菌していて、ときに細菌性髄膜炎、菌血症、肺炎、副鼻腔炎、中耳炎といった病気を起こします。

肺炎球菌による化膿性髄膜炎の罹患率は、ワクチン導入前は5歳未満人口10万対2.6～2.9とされ、年間150人前後が発症していると推定されていました。致命率や後遺症例（水頭症、難聴、精神発達遅滞など）の頻度はHib（ヒブ）による髄膜炎より高く、約21%が予後不良とされています。現在は、肺炎球菌ワクチンが普及し、肺炎球菌性髄膜炎などの侵襲性感染症は激減しました。

肺炎球菌ワクチンについて

肺炎球菌による感染症を予防するワクチンです。90種類以上ある肺炎球菌血清型のうち重症感染症から分離される頻度の高い20又は15の血清型の莢膜を精製し、免疫効果を高めるためにキャリア蛋白を結合させた結合型ワクチンです。

副反応

副反応としては、局所反応として腫脹、紅斑、硬結など、全身反応として主なものは発熱、易刺激性、傾眠状態などが認められています。重い副反応としては、非常にまれにショック、アナフィラキシー、けいれん、血小板減少性紫斑病等が報告されています。

対象者及び接種スケジュールについて

生後2か月以上5歳未満（5歳の誕生日の前日まで）
※対象年齢を過ぎると、公費での接種は受けられなくなります。
※2回目以降の接種は、ワクチンを接種した日の翌日から起算してください。

1回目接種開始月齢	接種間隔
生後2か月以上7か月未満	初回接種：27日以上の間隔で3回　※**生後24か月未満**（標準的には生後12か月まで） ※2回目の接種が生後12か月を超えた場合、3回目の接種は行わないこと 追加接種：**生後12か月以降に**、初回接種終了後、**60日以上**の間隔をおいて1回（標準的には生後12～14か月の間に） 1回目 →27日以上→ 2回目（生後24か月未満）→27日以上→ 3回目（生後24か月未満）→60日以上→ 追加（生後12か月以上） ※2回目、3回目が生後24か月を超える場合は2回目、3回目は行わず、60日以上の間隔をあけて追加接種を実施。また、2回目が生後12か月を超える場合、3回目は行わず、60日以上の間隔をあけて追加接種を実施。
生後7か月以上12か月未満	初回接種：27日以上の間隔で2回　※**生後24か月未満**（標準的には生後12か月まで） 追加接種：**生後12か月以降に**、初回2回目終了後、**60日以上**の間隔をおいて1回 1回目 →27日以上→ 2回目（生後24か月未満）→60日以上→ 追加（生後12か月以上） ※2回目が生後24か月を超える場合は2回目は行わず、60日以上の間隔をあけて追加接種を実施。
12か月以上24か月未満	60日以上の間隔をおいて**2回**　1回目 →60日以上→ 2回目
24か月以上5歳未満	1回のみ　1回目

接種時に持参するもの

① 小児用肺炎球菌ワクチン接種予診票
② 母子健康手帳（接種歴を確認するとともに、予防接種を受けたことを記録します。）